

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 7 日現在

機関番号：34414

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820067

研究課題名(和文) 初期フランドル絵画における祈祷者像の「モデル」

研究課題名(英文) "Model" of Prayer Portrait in Early Flemish Painting

研究代表者

今井 澄子 (IMAI, Sumiko)

大阪大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：20636302

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、初期フランドル絵画に描かれた祈祷者像の「モデル(模範)」を探究するために、当時この地を支配したブルゴーニュ公の祈祷者像と肖像を包括的に調査した。それにより、三代目ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの祈祷者像に、敬虔な信仰心と自身を称揚する表現が共存するばかりでなく、敬虔さと自己称揚の均衡をとろうと配慮する傾向がうかがえることが明らかとなった。また、初期フランドル絵画の注文主でありフィリップ・ル・ボンに仕えたニコラ・ロランの祈祷者像の分析からは、ロランがフィリップの祈祷者表現を踏まえ、抑制的な表現も取り入れつつ、自己を称揚する祈祷者像を表わしたことが示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to analyze the "model" of prayer portrait in early Flemish painting, by making comprehensive study on portraits and prayer portraits of Duke of Burgundy. It has made remarkable observations concerning prayer portraits of Philip the Good: they include both piety and self-admiring representation, trying to keep these conflicting elements in balance. Having reached the above result, this research compares between prayer portraits of Philip the Good and those of "patron" of early Flemish painting. By examining particularly prayer portraits of Nicolas Rolin, chancellor of Duchy of Burgundy, it has reached the conclusion that Philip the Good and his representation took an important role as a "model" for prayers in early Flemish painting.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：美術史 フランドル ブルゴーニュ 祈祷者 ネーデルラント パトロネージ フィリップ・ル・ボン

1. 研究開始当初の背景

15世紀にアルプス北方で栄えた初期フランドル絵画においては、注文主が聖なる場面で祈る「祈祷者像」が多く描かれた。その表現の特徴は、祈祷者が敬虔な信仰心を示しつつ、富やステイタスを強調する点にある。また、造形上は、祈祷者が祈祷対象と同じ大きさで空間を共有するような描写が革新的である。この聖俗をあわせもつ新しい祈祷者像が表わされた理由については、先行研究において、当時、この地域が中世から近世へと移行する転換期にあり、ルネサンス的な新しい精神が出現していたという時代状況から説明されてきた。さらに、図像の直接的な参照源や、個人祈祷をはじめとする宗教実践との関連についても探究されてきた。しかし、これらの検討のみでは、初期フランドルの宗教画において、とくに祈祷者が自己を称えるような (self-admiring) 表現がみられるようになった事情が十分に解明されたとは言いがたい。

そこで必要となるのが、初期フランドル絵画の祈祷者表現のイメージソースや成立事情を、祈祷者像以外の作例や記録も考慮しつつ、広く探究するアプローチである。この点で重要なのは、初期フランドルの画家や注文主の「モデル(模範)」となる先導的役割を担った人物として、当時この地域を支配していたブルゴーニュ公である。ブルゴーニュ公は、初期フランドルの画家たちのもっとも有力なパトロンであり、祝祭などのさまざまな場面において、イメージを効果的に用いていた。また、その振る舞いや慣例は、フランドル地域の文化形成も担うほどであった。しかしながら、ブルゴーニュ公を描写した芸術作品は、一見、初期フランドル絵画の祈祷者像の直接的な図像源泉とはみなし難いため、両者の比較検討は、いまだ十分になされていない。それゆえ、ブルゴーニュ公と公の注文作品が、フランドル地方の画家と注文主たちに与えた影響について分析することで、初期フランドル絵画の祈祷者像の特性をより適切に捉えられると考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ブルゴーニュ公の祈祷者像と肖像が、初期フランドル絵画の祈祷者像の「モデル(模範)」となっていたことを明らかにすることである。具体的には以下の3点の解明を目指す。

(1) 三代目ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの祈祷者像と肖像の造形上の特徴を明らかにする。とくに、敬虔な信心と自己称揚的な表現がどのように描写され、両要素がどのような関係にあったのかという問題に注目する。

(2) ブルゴーニュ公をはじめとする当時の支配者に求められた行動規範、およびブルゴーニュ公が理想とした自己イメージを明らかにする。その際は、富や権力に関わる世俗的な要素はもちろんのこと、信仰上の観点から、良きキリスト教徒であることがどの程度求められたかという問題も考慮する。

(3) 祈祷者像を中心としたブルゴーニュ公のイメージとフランドル絵画の祈祷者像との関連性を明らかにする。とくに、造形上の直接的な影響関係だけではなく、祈祷者像の担う効果や役割が両者に共有されているか否かという点を明確にすることを目的とする。

以上の検討により、ブルゴーニュ公の祈祷者像の表現が初期フランドル絵画の祈祷者像に共有されていることが示されれば、初期フランドル絵画の祈祷者像の成立事情がより明確に捉えられることになる。

3. 研究の方法

(1) ブリュッセル・ハーグ・ディジョン・ウィーンなど、おもにヨーロッパに所在する美術館・図書館・資料館の図録や目録から、フィリップ・ル・ボンを中心としたブルゴーニュ公の祈祷者像・肖像をリスト・アップし、制作年・媒体・主題・図像内容・構図・注文主などの観点から整理・分類した。そのなかから、重要な表現が含まれる作例については、所蔵先の機関で調査を行うとともに、高画質の画像資料を入手することで分析の際の補助とした。

(2) ブルゴーニュ公が理想とした自己イメージについて、ジョルジュ・シャトラン、ジャック・デュ・クレルク、オリヴィエ・ド・ラ・マルシュなどの年代記作者の記述や古文書をもとに検討した。あわせて《ギデオンのタペストリー》などの分析も行い、ブルゴーニュ公の美術作品の利用方法を具体的に検討した。さらに、公のイメージ利用の意識が初期フランドル絵画の注文主たちに与えた影響も考察した。

(3) ブルゴーニュ公の祈祷者像・肖像と、初期フランドル絵画の祈祷者像との比較を行った。初期フランドル絵画の作例は膨大な数にのぼるが、当該研究の開始前から通時的な作品分析を進めていたため、その蓄積を利用して検討を行った。そして、ブルゴーニュ公の祈祷者像の比較対象として、公国の宰相をつとめたニコラ・ロランが適切であると判断し、分析を進めた。

4. 研究成果

(1) 第一の成果は、フィリップ・ル・ボンの肖像と祈祷者像を包括的に調査し、板絵・写

本挿絵・壁画・ステンドグラス・彫刻作品から構成されるリストをほぼ完成させた点である。これにより、フィリップが、当時の支配者のなかでも数多くの肖像と祈禱者像を制作させ、流布させていたことがうかがえた。

また、本研究ではさらに、リスト・アップした作例の通時的な分析を進めた。とくにフィリップ・ル・ボンが注文した『聖務日課書』や『時禱書』、そして『天使祝詞論』に表わされた祈禱者像については、大きさ・空間・衣服・仲介聖人との関係などにおいて、自己称揚的な要素と、信者としての適切さに配慮した要素が共存しているさまが顕著に見いだされた。

同様に、リスト分析において特筆すべき点は、フィリップ自身が意識した表現が明確になったことである。すなわち、他者が注文したフィリップの祈禱者像と比較すると、フィリップ自身が注文し描かせた祈禱者像には、自己称揚的な要素をふまえつつ、いち信者として謙遜するような抑制的な表現が強く認められるのである。このような表現は、信仰上の配慮でありつつ、自身が支配者に相応しいことを誇示する自己称揚の一環でもあったと捉えることができる。

以上の成果は、雑誌論文として公表した【下記5.「主な発表論文等」の[雑誌論文]】。

(2) 第二の成果として、ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンが理想とした自己イメージと美術作品の利用について、興味深い分析結果を得ることができた。まず、シャトランやデュ・クレルク、そしてド・ラ・マルシュなどの当時の年代記作者たちが、フィリップを、権威と信心を兼ね備えた支配者として捉えていたことが明らかになった。このような評価は、イタリアなどの諸外国からの訪問者たちの記録にも認められた。

また、年代記作者たちによる賞賛やブルゴーニュ公の行動記録からは、フィリップ・ル・ボンが、カエサルやアレクサンダー大王、あるいはギデオンなど、過去の偉大な支配者や聖書の登場人物を自身の「モデル(模範)」とみなしていたことも確認できた。

そして、フィリップ・ル・ボンが注文・制作させた《アレクサンダー大王のタペストリー》や《ギデオンのタペストリー》は、歴史上の支配者の姿を称揚し「モデル」として表わすことで、支配者としてのブルゴーニュ公自身の権威をも強調する効果を有していたことが明らかになった。このような大型のタペストリーは、写本や彫刻などのさまざまな媒体を利用して流布させた肖像・祈禱者像とともに、フィリップ自身を称揚する手段として重視な役割を担っていたと結論づけることができる。

以上の成果は、学会で報告するとともに、図書・雑誌論文として公表した【下記「主な発表論文等」の[雑誌論文]、[学会発

表]、[図書]】。

(3) 第三の成果は、フィリップ・ル・ボンの祈禱者像と初期フランドル絵画の祈禱者像の影響関係を具体的に捉えたことである。まず、初期フランドル絵画の祈禱者像の代表例として、《ロランの聖母子》や《ポーヌの祭壇画》におけるニコラ・ロランの描写に自己称揚的な表現が見られることを確認するとともに、その自己称揚的な要素が、時代が進むにつれて抑制的な表現へと変化していったさまを見いだした。

また、ロランの祈禱者像の変化の要因として、フィリップ・ル・ボンの祈禱者像表現の効果からの影響が認められたことも大きな成果である。すなわち、制作年代やモチーフ表現の観点から、ロランの祈禱者像には、ロランが仕えたフィリップ・ル・ボンの祈禱者表現を踏まえたうえでの適切さへの配慮があったとみなすことができるのである。この検討において得られた新知見は、今後、ブルゴーニュ公と初期フランドル絵画の祈禱者像の比較研究を総合的に進めていくにあたっての重要な視点となる。

さらに、ブルゴーニュ公のイメージ利用と、初期フランドル絵画の祈禱者表現の通時的な分析の一環として、15世紀後半にかけて見られる都市イメージを利用するような自己称揚のありかたが、ブルゴーニュ公を介してフランドルの市民層にまで広まっていたことを明らかにした。

以上の成果は、雑誌論文として公表した【下記「主な発表論文等」の[雑誌論文]】。

以上の研究においては、初期フランドル絵画の祈禱者像の「モデル」としてのフィリップ・ル・ボンの祈禱者表現の重要性を指摘するとともに、公の「モデル」としてのありかたを具体的に分析することができた。本研究では、これまで個別に分析されることの多かったブルゴーニュ公国の美術と初期フランドル絵画を結びつけた点でも意義深いと位置づけることができるだろう。次年度以降は、比較分析の対象を、シャルル・ル・テメレルなどのフィリップ・ル・ボン以外のブルゴーニュ公にもひろげ、15世紀のブルゴーニュ公国治下におけるフランドル絵画の祈禱者表現について包括的に検討していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

今井 澄子、「ニコラ・ロランの祈禱者像 - 《ポーヌの祭壇画》と祈禱者像の「モデル」をめぐる - 」、『大阪大谷大学 文化財研究』、査読なし、第14号、2014年、

1-25 頁。

今井 澄子、「信心のモデル、自己称揚のモデル - ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの祈禱者像と初期フランドル絵画 - 」、『大阪大谷大学紀要』、査読なし、第 48 号、2014 年、1-21 頁。

今井 澄子、「Wim BLOCKMANS, Till-Holger BORCHERT, Nele GABRIELS, Johan OOSTERMAN & Anne Van OOSTERWIJK (eds.), Staging the Court of Burgundy [Studies in Medieval and Early Renaissance Art History (HMSAH) 69], Turnhout, Brepols Publishers, 2013, IV + 396 p., €115.」、『西洋中世研究』、査読なし、No.5、2013 年、162-163 頁。

今井 澄子、「初期フランドル絵画の「実景」- 都市ブリュッヘのアイデンティティの形成とその反映をめぐって - 」、『大阪大谷大学 文化財研究』、査読なし、第 13 号、2013 年、1-27 頁。

今井 澄子、「ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの「モデル」 - 《ギデオンのタペストリー》の政治的・宗教的機能 - 」、『大阪大谷大学紀要』、査読なし、第 47 号、2013 年、12-29 頁。

〔学会発表〕(計 1 件)

今井 澄子、「ブルゴーニュ公国の美術 - フィリップ善良公の注文作品を中心に - 」、『第 14 回 文化財学会』、2014 年 2 月 28 日、大阪大谷大学。

〔図書〕(計 1 件)

今井 澄子、慶應義塾大学出版会、「ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンのコレクション - アレクサンダー大王のタペストリーにみる政治的役割 - 」、遠山公一・金山弘昌編『美術コレクションを読む』、2012 年、191-211 頁。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

今井 澄子 (IMAI, Sumiko)
大阪大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：20636302

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし